

論文審査の結果の要旨

報告番号	第 1 号	氏名	成瀬 祐子
論文審査担当者	主査 廣田 直子 副査 福島 智子・石原 三妃		

(論文審査の結果の要旨)

日本の特定給食施設等では、単に栄養学的に適切な食事の提供だけではなく、利用者がより健康的な生活を送る上での教育媒体として、さらに、利用者だけではなく、その家族や地域社会の健康づくりに寄与するという役割も求められ、特に、成長期の子どもたちに提供される給食では、こうした教育的な役割が重視される。

本論文において、著者は、成長期である子どもたちに提供される学校給食と保育所給食の教育的価値、具体的には、給食を喫食する子ども及びその家族が健全な食生活を営む力を培うこと、すなわち、健全な食生活への食意識や食態度の変容を経て食行動を向上・改善させ、それを継続させることに対する貢献可能性についてまとめた。論文は5章で構成され、主論文として国際誌 (Asian Journal of Dietetics, 5(2-3), 53-61, 2023) に掲載された研究成果は、第2章「学校給食を通じた子どもおよび家族への食教育」としてまとめられている。

第1章では、学校及び保育所の給食について、食教育という視点を重視して、これまでの先行研究の成果と課題についてまとめた。学校給食を扱った第1節では、先行研究の報告をレビューし、第2節では、保育所・幼稚園給食について、自らナラティブレビューを行って、既存の給食提供そのものが子どもや保護者に及ぼす影響について研究しているものは非常に少なかったことをまとめ、学位論文の研究テーマの意義について示した。主論文を中心にまとめられた第2章では、学校給食が小学生およびその家族に及ぼす影響について、長野県松本市の西部学校給食センターが配食する小学校11校に2021年4月に入学した児童822名の保護者を対象として実施した質問票調査による研究成果をまとめた。統計手法を用いて、子どもの食意識・食態度の変化、および家族の食への関心や家での食に関する話題の増加などについて分析した結果、給食開始から半年経過後の10月でも、給食は子どもたちの関心事であり、子どもが学校給食について家族に話をする家庭では、そうでない家庭と比べて、家族の食への関心および食に関する話題が有意に増加していたことを明らかにした。また、子どもが学校給食を食べるようになって家族に変化があったと思うことへの自由記述のテキストマイニング分析結果と合わせて、こうした家族の変化には、子どもが学校給食のことを家庭で話すことが重要なポイントになっており、そのための仕組みづくりが必要であるとまとめている。第3章では、長野県3市の公立保育所の4、5歳児クラスに通う保護者1,090人を対象に行った調査票調査の結果についてまとめた。保護者の食育に対する関心度による3群比較から「関心あり」群は、保育所給食の献立を見る、家庭の食事の参考にする、給食で提供されている料理を家で作るという態度が強く、子どもが保育所給食を食べるようになったことによる子どもおよび家族の変化に関する自由記述のテキストマイニングと併せて、保護者は、子どもの好き嫌いの改善や初めての料理に挑戦する姿勢の育成など、保育所給食が子どもに良い影響を及ぼしていると認識していることを明らかにした。また、子どもの食に対する姿勢の変化や子どもが保育所給食のことを話したり、保育所給食で食べたメニューをリクエストしたりすることが、保護者にも影響を及ぼしていると推察した。第4章では、ここまでの研究で明らかになった学校給食および保育所給食が子どもおよびその家族に及ぼす影響について、社会的認知理論に基づいて整理し、給食提供を通じた今後の働きかけの方向性についてまとめた。最後の第5章では、第1~4章の概要をまとめている。

本論文は、主に調査研究から、日本の学校給食および保育所給食がそれを喫食する子ども、およびその家族に対する食教育という視点での価値について独自性と有用性を有した研究成果をまとめたものであり、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。